



鹿見志
お戦
記第十
篠田久太郎編

10

15

20

25

A432
9t

藤田仙果錄
永島孟齋畫

繪本 鹿兒島戰記

東京書肆

青成堂版

鹿兒島戰記五編下

東京 藤田仙果編

茲は鹿兒島の縣廳を大書記官の

田畠常秋 田畠常秋

西郷隆盛が兵とひのそ

歩張るのまの義

事とあへん兵糧

強新軍用金

何くもとあへん

執使柳を公鹿兒ト

あへん懇て説諭ありけ

其非を知るもの

百已方



割腹ありて

失くすける

○上々の事

早よ出張

せし官軍

方の抜刀

隊のいんまも

振る人あれば

その勇猛絶倫

あつ暴徒が堅固の

つぎ立つる三の墨場へ

かりぐらふを鹿兒ども

〇徳をもちた

みどりの

おち乱し難

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

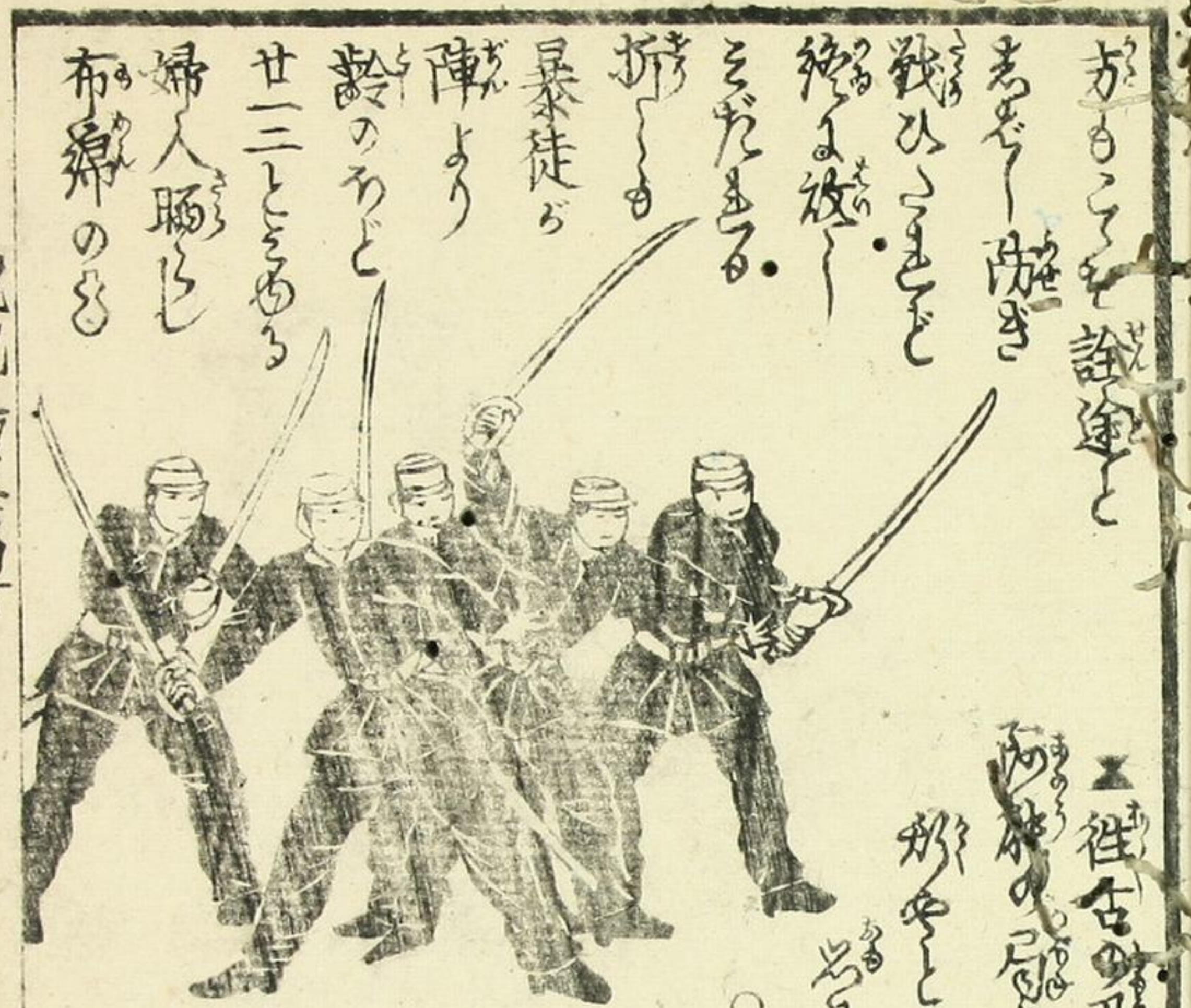
お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん



おもこを詮途と

あつ暴徒が

戦ひこま

終よ放

とたまる

折

暴徒が

陣より

勢のちど

廿二とさめ

婦人脇に

布帯のも

〇徳をもちた

みどりの

おち乱し難

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

お振るあふん

〇さそ又江田
陸軍お佐り
早
合ひ武術の
早
目
と墨場の内より

右頁の五ノ目

小銃をりて列

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

小銃の中

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍

おとせの官軍



暴徒ら把法強く押して

致し角力奥行をせし

鹿兒

長崎

と奥行

路を所々

筋より九州

連まて西国

あまの引き

もの角力

ころろ云へる

角力

年寄

浪花

二足の

牛らち前めたり

あまの引き

荒牛

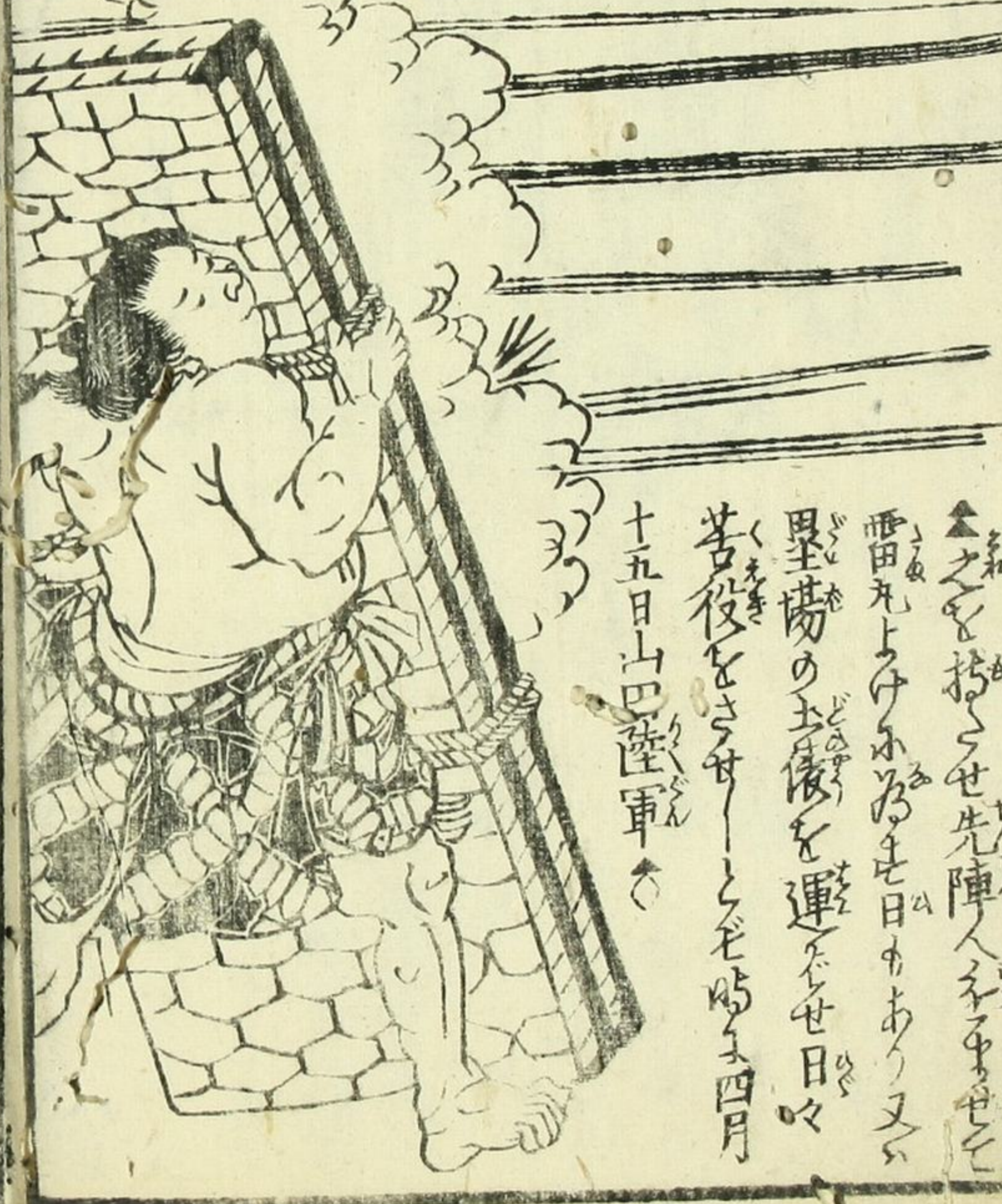
おとせの官軍

おとせの官軍

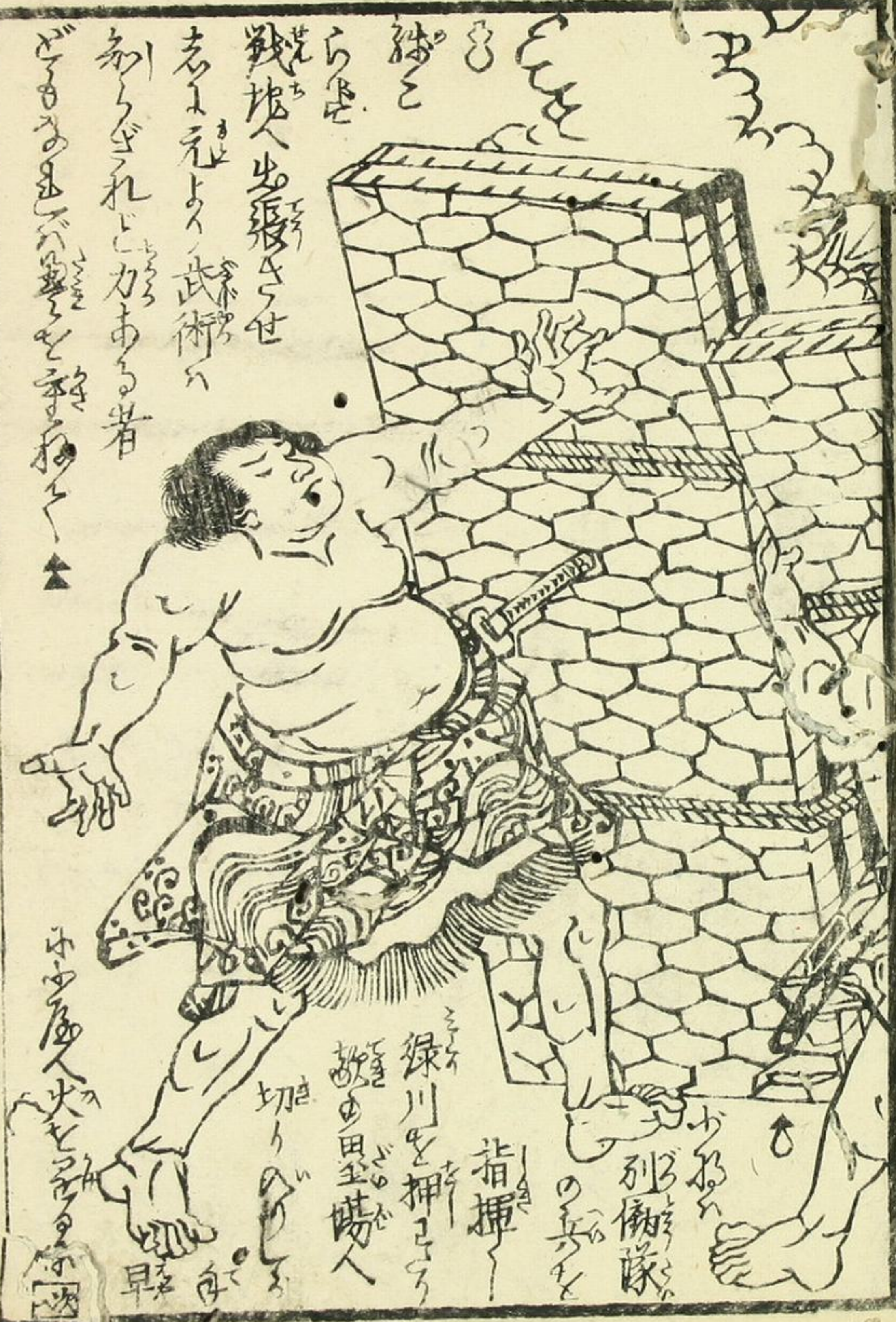
おとせの官軍

おとせの官軍

あしふ
跡の鹿
兒島人等
あしふあり
とこふひひ
後以再々
角力奥の
さやうが
後よ
角力
と一味
さしせ



▲之を拵らせ先陣人を重んぜし
雷丸よゆふるま日あり又
墨場の土俵を運せ日
苦役をさせしと毛時四月
十五日山巴陸軍



戦地へ出張させ
志し元より武術の
あしふれど力ある者
あしふるまを拵らせし

緑川を押し
切りの
指揮
列隊
の兵を
早



八方へ燃ゆる
山風



暴徒もこゝろ不
辟易しさんざん小破

けりこの時山川陸軍

中佐は戦ひを依りあて

中隊の兵を率へ八瀬川を

渡りて海軍を異往を

うち拂ひ給ふべき運を

さて又徳幸城中より山鹿の

がよりと激しく砲声響く

逆ぐるゆと谷お摺り昇る

早くもそれとさあけられ

けり方よりもけりしよ

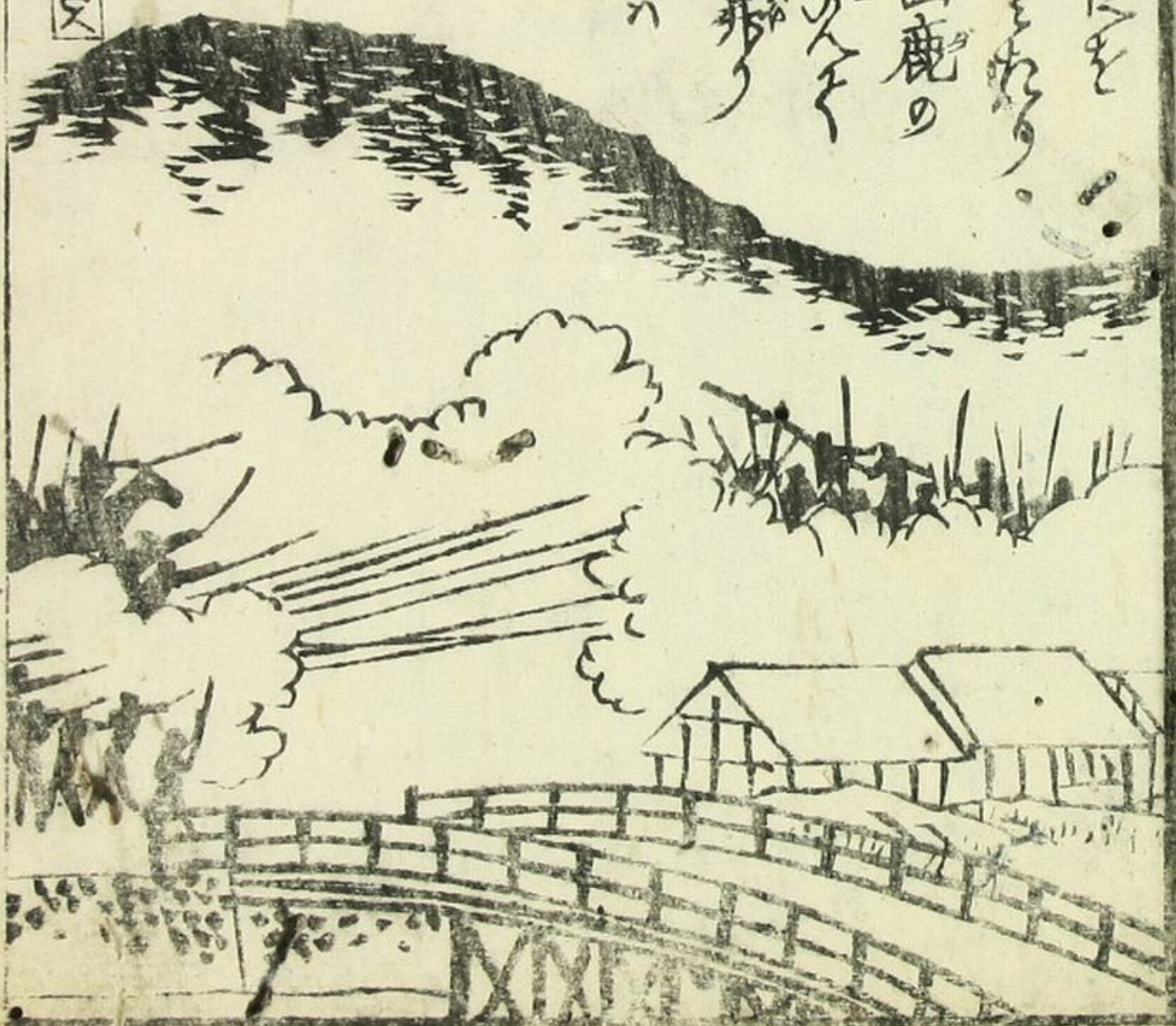
令を下せの猛攻のゆえを

をりし擧山中佐見玉

少佐の大隊の兵を

率へ城門をさりと押

穿らたドツとたうり小



山鹿口の戦い

影 出 せ
さ
その
野原の
竹の如く
城を圍む
唐刀の
勢へを
暴徒も防壁の
影をうけし



いこい
山鹿口の戦い
うろと背兵の
註を
あれば異は
どもの勢とや
日向路へ引よ
影も山川陸軍
中佐も速
故をもち
城下の
山見玉の



而氏も先向ひ一同よから總攻をよす
城中まことの祝砲をきかぬ
降参五十有余日勇猛
此の鹿兒島を驚かす

池邊吉十郎

厚くしとさくしと屋をよす
筆城を治とすけしと代
赤坂の事ともありさく
然事を知りぬかき人
あしとれぬ懸懸を
元之姫くふおれ
総督有柄川
宮よりめ多軍方



常秋の
城振りの上り日向
落しと西戦あさん
田島
送東
山

西郷隆盛

ありて本堂を修す城内よ
移されしころ西郷隆盛
急よ隊長の人々をよす

桐野利秋

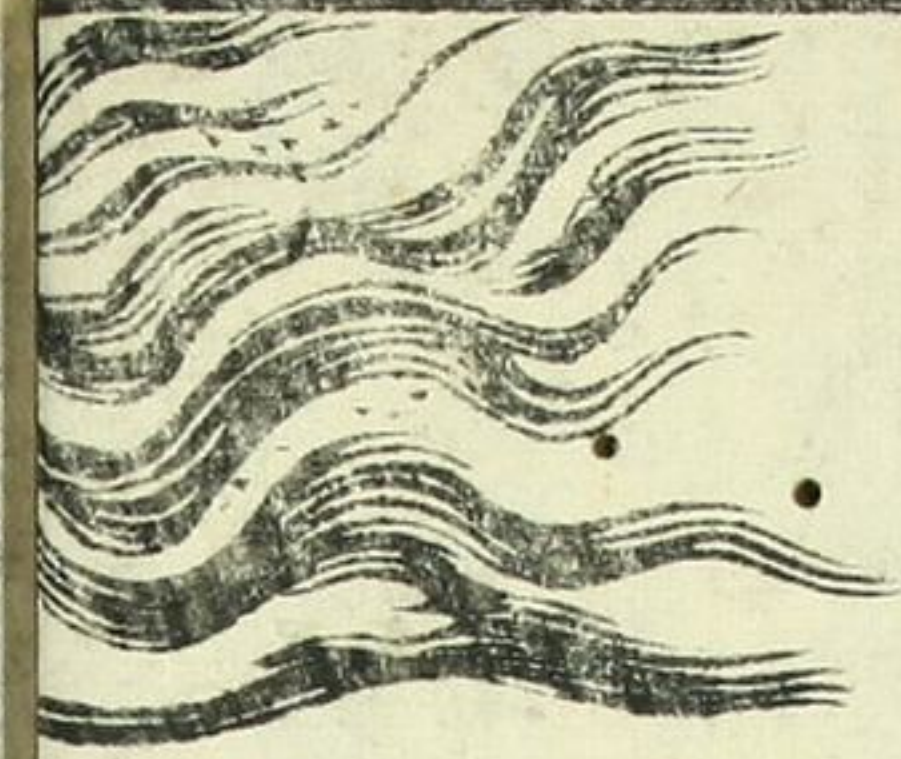
官軍修すへ連絡
味方多く捨てられ
一旦鹿兒島へまき
かゝり
再度の戦ひ致さんとのめを
桐野のち滑りてまき



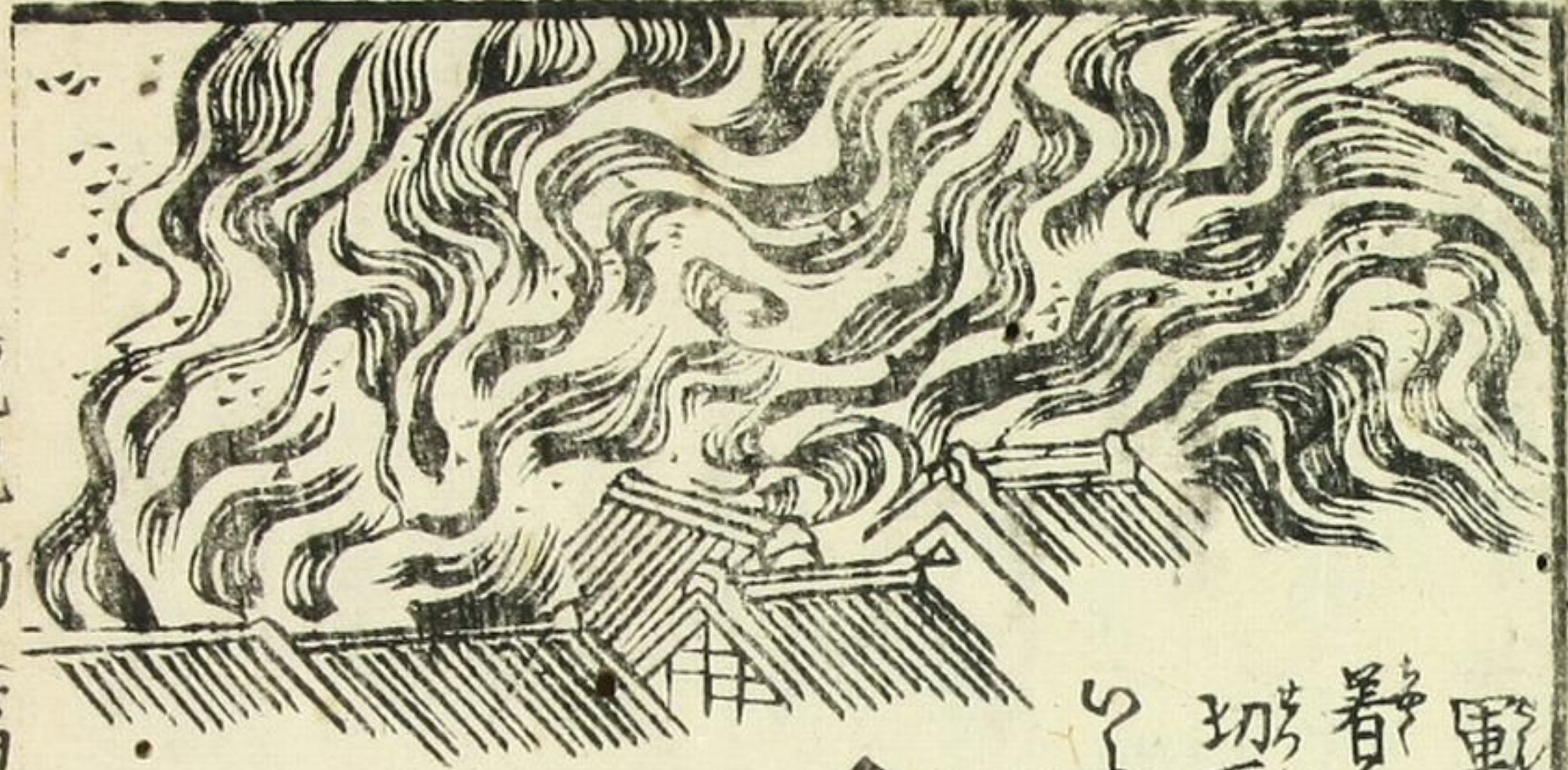
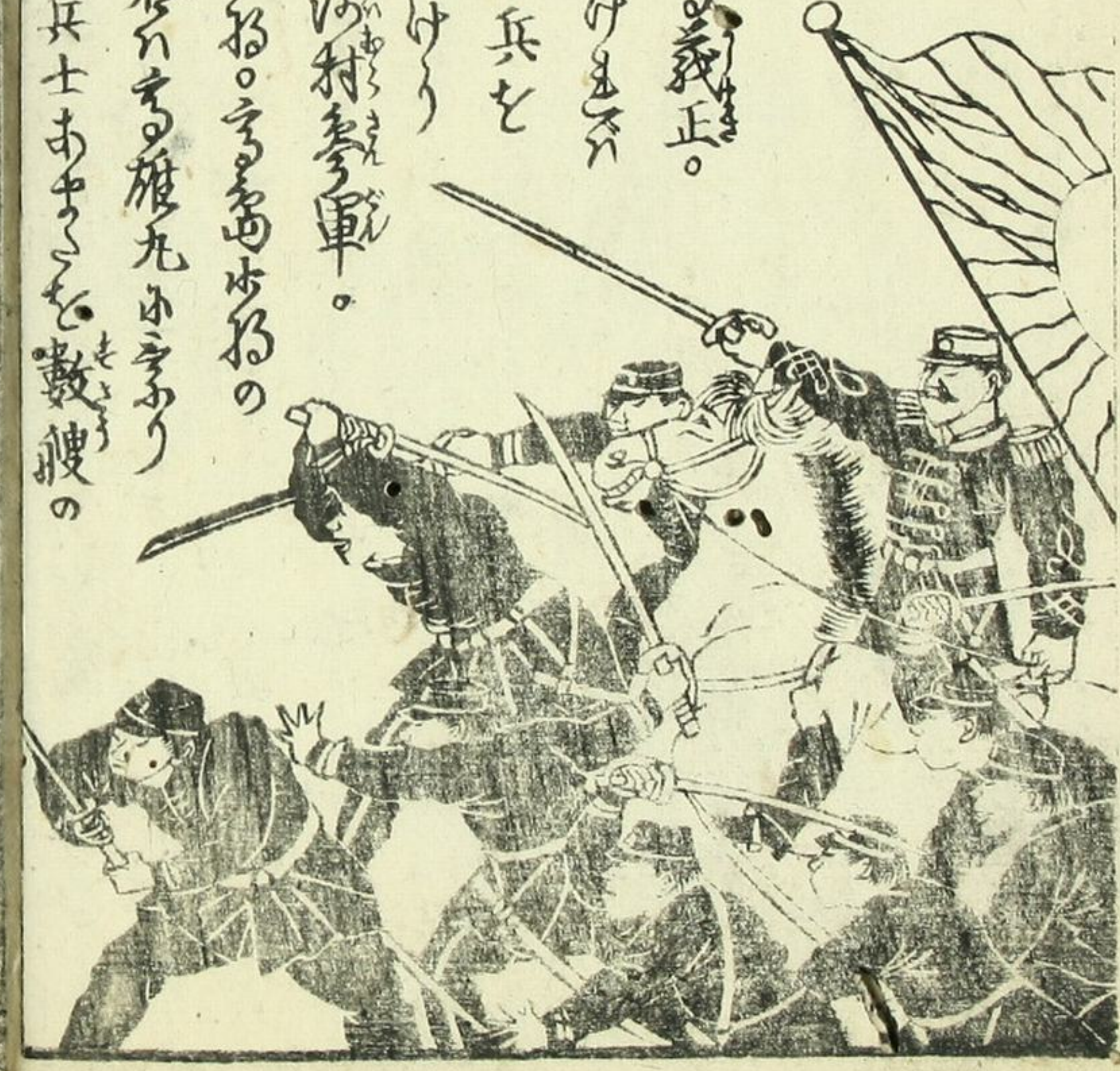
山下謙蔵

いみ放つと修すもの
巨魁池邊吉十郎を
出でし兵を引上り
いしゆの修す存
山を
本堂
と
定
不
区

竹宮御船へんゆと
防戦しそとゆと
日向強人引えんと
ひひけるゆと船乗
隊長山下孫藏。日まの義正。
田中東穂も同意しけと
隊定空まかりとれし兵を



犯しけり
○時よ河村参軍。
大山ゆお。さるあゆおの
徳君のさる権九小あり
総と兵士あつても数艘の



鹿兒島城下
◆五月五日夜も
いなき明さつた小
暴徒等も多勢
とよせまあり
甲突川を渉ち
ころし城山の麓
ある官軍小



近付くうねり期したる

車もまの官軍一歩も

砲撃しかり幾ひの

妨げられ城下の

お多火を

かければ

四方は燃上り

おの八方小とび

散りまゝ二里ま余

焚き

拂ひぬ

河村參軍

鹿兒島戦記五編終

鹿兒島城山



010190510447



昔田家

